第3号　地域連携プロジェクト（岡垣町・九州共立大学）

地域活性化

岡垣歴史新聞

制作・編集・発行

岡垣町・九州共立大学　地域連携
『岡垣歴史新聞』
プロジェクト編集委員会
（九州共立大学内）
代表　山田　明
〒807-8585
北九州市八幡西区自由ケ丘1－8
093－693－3403（山田明研究室）

巻頭言　昔、岡垣町に炭鉱があった！

九州共立大学　山田　明

かつて岡垣町には多くの炭鉱がありました。それは日本が通ってきた歴史と大きな関係があります。明治から一九五五（昭和三十）年ころの話です。一九一二（大正元）年に開鉱した海老津炭鉱は、第一次世界大戦によって本格的に活動し、大正時代には千二百人以上の従業員が働き、百合野から海老津駅まで石炭を運ぶトロッコがありました。最盛期の一九二八（昭和三）年には、千三百二十七人の従業員で十四万一七〇〇トンもの石炭を掘り出したといいます。現在の戸切小学校は、この海老津炭鉱で働く人の子どもたちのために、海老津炭鉱を経営している会社によって開校されました。私立の小学校を母体としているのです。

時代は移り、エネルギー革命、いわゆる石炭から石油へという時代背景をへて、岡垣町の炭鉱も一九六一（昭和三十六）年にすべて閉山しました。当然、人口も減少し、町外に出た関係者は二千人といわれています。

現在、岡垣町の町民の皆さんは、炭鉱の歴史をご存知でしょうか。おそらく少数であると思われます。岡垣町の炭鉱の最盛期から九十年、閉山から五十七年を迎えようとしている今、過去の炭鉱の歴史を再認識し、地域の歴史として若い世代に語り継いでいくことは、未来へのまちづくりに寄与することとなるでしょう。

地域活性化新聞「岡垣歴史新聞」第3号は、九州共立大学の学生が地元の炭鉱関係者の方々の案内でフィールドワークと取材を行い、岡垣町史やその他の資料をもとに整理したものです。内容は、昭和期の炭鉱、海老津・高陽炭鉱、炭鉱労働、労働組合、労働災害、鉱業被害、閉山と産炭地問題等です。この小紙を町民のみなさんがあらゆる機会に活用していただき、岡垣町の歴史を若い世代とともに語り合い、次世代に継承していただければ幸いです。

岡垣歴史新聞の第3号発刊に寄せて

岡垣町長　宮内　實生

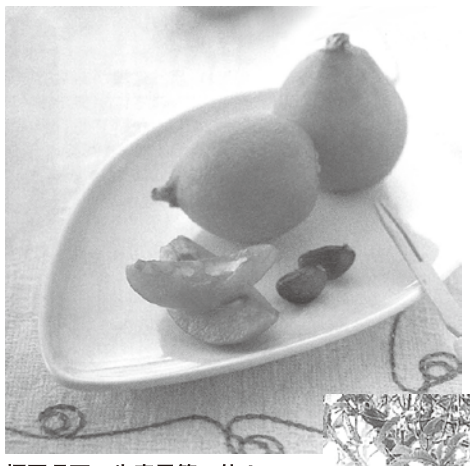
岡垣歴史新聞の第3号は、「岡垣の炭鉱」の特集が組まれています。当時の岡垣町は、石炭産業の発展により人口が大幅に増えたもののその後の炭鉱閉山により人口が激減したことが統計で見ることができます。その後の岡垣町は、北九州市と福岡市のほぼ中間に位置することから、両政令指定都市のベッドタウンとして宅地開発が盛んに行われ、炭鉱閉山後の昭和三十七年の町制施行以降、着実に人口増加をたどってきました。しかし、近年は、炭鉱閉山時以来、約半世紀ぶりに人口が減少に転じ、直近の平成二十七年国勢調査では、人口三万一千五百八十人となり前回の平成二十二年に比べ五三九人が減少しました。この人口減少は、約四十年間も続く少子化によるものが大きな要因であり、現在も減少を続けています。

人口減少は、税収の減少はもとより、町民の皆さんの活動が盛んな我が町にとって、コミュニティ機能の低下の恐れがあることから、大きな課題と捉えています。

そのような中、現在は、住みたいと思っていただける町、住み続けたいと思っていただける町を目指し、まちづくりに取り組んでいます。

結びに、この岡垣町歴史新聞により町民の郷土愛がより一層深まることを願いまして岡垣歴史新聞第3号発刊のお祝いの言葉とさせていただきます。

高倉びわ小史

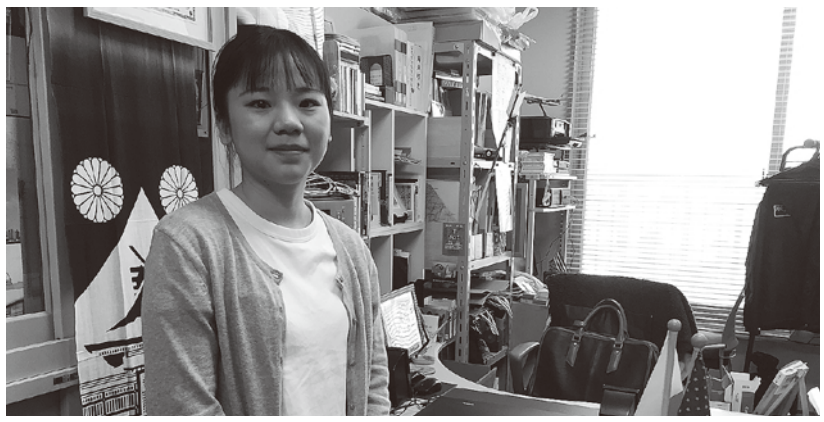


福岡県下で生産量第一位！

樹齢100年！現役高倉びわの原木

100年以上前の1903（明治36）年、岡垣の自然環境がびわ作りに合っていることを知った大村永壮さんが、高倉地区で栽培を始めた。全国的にも歴史あるびわの産地として有名になった岡垣は、肥料や土づくりにこだわるなど味を高める技術力が高いと評判である。品種は、卵型で糖度が高い「茂木（もぎ）」をはじめ、湯川地区で作りだされた大玉で味が良い「湯川（ゆがわ）」などがある。

出展：パンフレット「Town Map　岡垣　～おいしさまるかじり～」
岡垣町観光協会（一般社団法人）
岡垣町役場産業振興課



2018.11　九共大・山田研究室にて

スーパーで売られている高倉びわ

日中「びわ」考

余（ショー）婷（ティン）婷（ティン）（留学生・中国）

おいしいフルーツ、「びわ」。この名前の語源は何だと思いますか。実は、中国の楽器に関係があります。びわの実の形が「琵琶」という弦楽器に似ているので、中国の昔の人は「枇杷」という名前をつけました。中国語で「琵琶」と「枇杷」の読み方が同じで、「ピパ」と言います。「木」の部分は「樹木」の意味をあらわしています。びわの原産地は中国の南部です。中国の唐代（六一八～九〇七年）にびわが日本に伝わり、日本では「唐びわ」ということばもあります。この後、一八三〇～一八四七年の間に、中国南部からびわの種が再度、長崎県の茂木に持ち込まれて「茂木びわ」が育て上げられました。一八七九年、田中芳男は「茂木」の種を東京で栽培し「田中びわ」を育て上げました。それから、交雑、変異などでさまざまなびわができたということです。私は、中国の湖南省から日本に来て三カ月になりましたが私はびっくりしたことがあります。例えば、日本のフルーツが中国よりずっと高価なのです。びわの値段が中国の五倍ぐらいです。何が違うのかと思って、私は日本のびわを食べてみました。日本のびわは果実が大きくて、水分がたっぷりあり、甘味がちょっと薄いけどさっぱりしています。中国では、実家の前にびわの木が植えてあるので毎年美味しいびわをたくさん食べました。中国の南部に植えられるびわはあまり大きくありませんが甘さがあります。中国では、びわの実だけでなく、びわの花と葉もよく食用に利用されます。びわの花がミツバチの食べ物ですから、ミツバチ養蜂家もびわの木を植えます。びわの葉は、漢方薬の材料としても重要な役割を果たします。大きな葉を日に晒（さら）して乾かしてから粉々にします。咳（せき）止めにも体内の熱を下げるのにも役立ちます。中国で「川貝枇杷膏」という咳止め薬が有名です。現在ではアメリカでも人気があるそうです。花は秋から冬のはじめに咲き、成熟は春から夏の初めです。ほかの果物より早いです。それで、中国では「びわは毎年初めての果物」という俚諺（りげん）があります。最後に、岡垣の皆さんにお伝えしたいことがあります。中国では、お酒やミルクとびわを一緒に食べることは食べ合わせとして良くないといわれています。気をつけて下さいね。

炭鉱

昭和期の炭鉱

長瀬智彦

昭和期の炭鉱は、大正時代中期から続く経済不況がその経営に大きな影を落とした。この時期の岡垣の炭鉱の消長もめまぐるしいものがあった。昭和五年には不況が深刻になり、石炭鉱業連合会は需要不振・炭価暴落のため送炭調節を決定する一方、中小炭鉱も石炭鉱業互助会を結成し、独自の出炭統制体制を整えている。こうした不況期には、賃金支払いも滞ることから、米などの現物支給をするところもあった。だが、この不況も昭和七年に上海事変が勃発すると、翌年には逆に石炭飢饉が叫ばれるようになった。さらに、昭和十二年の日中戦争が本格化してきたことにより、炭況好転の時期を迎える。これに伴い、岡垣の主力炭鉱であった高陽炭鉱も昭和十三年に操業を再開、同年、海老津炭鉱も新たに発足した。また戦時中の炭鉱には、朝鮮人労働者の姿もあった。その実態は詳しくはわかっていないが、海老津炭鉱の場合で、十五世帯ほどであったといい、多い世帯ではなかったといわれている。私自身、岡垣町のフィールドワークを行っている際に耳にした話であるが、岡垣では一家族で小さな炭鉱を掘削していたという。そのことから考えても朝鮮人労働者の数は少なかったのではないかと考えられる。そして昭和二十五年の朝鮮戦争が勃発すると、エネルギー革命により、石炭から石油へと転換していくことになる。これにより炭鉱は閉山へと向かい、昭和三十六年に海老津炭鉱が閉山し、ついに岡垣からも完全に炭鉱が消え去ったのである。

炭鉱の労働災害と炭鉱の暮らし

工藤匡貴

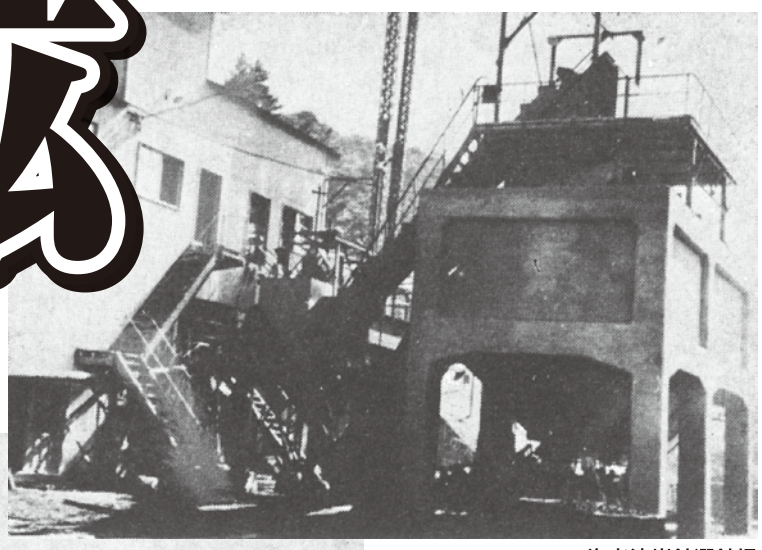
炭鉱における労働災害は、その発生率の高さと坑内という特殊な条件からくる災害規模の大きいことで知られている。岡垣の炭鉱では、大災害こそなかったが、やはり多くの災害が認められている。炭鉱災害には、坑内ガスの爆発をはじめとして、落盤、火災、単車の暴走・転覆事故など多様な状態がある。戦後の「鉱山保安法」によって改善はされたが、それでも増産体制の至上命令が下れば、法を無視した採掘となり災害につながった。やはり特筆すべきは、その発生率の高さである。昭和五十三年の全国炭鉱災害率は、全産業平均が二〇・二九％に対して、八〇・九八％と危険な炭鉱労働の実態を裏付けている。炭鉱生活の特色は、そこで働くほとんどの労働者と家族が炭住と呼ばれた五軒で一つの長屋となっていた社宅で生活していたということだ。各長屋に便所と水道は共同で設置され、風呂は炭坑内に共同風呂が一つあって、これをみんなが利用していた。隣家とは壁一つを隔てているだけで、家族ぐるみの親近感と連帯感を育んでいた。炭住での近所づきあいは、親類づきあいよりも深かったといわれている。炭鉱で働く人々は、九州各県や遠くは岐阜県あたりからきている人など風俗・人情の違う人たちのより集まりである。だからこそ頼れるものは近隣の人々であり、冠婚葬祭から日常の近隣交際に至るまで親身な付き合いが見られた。

仮装行列でにぎわう運動会（高陽炭鉱）

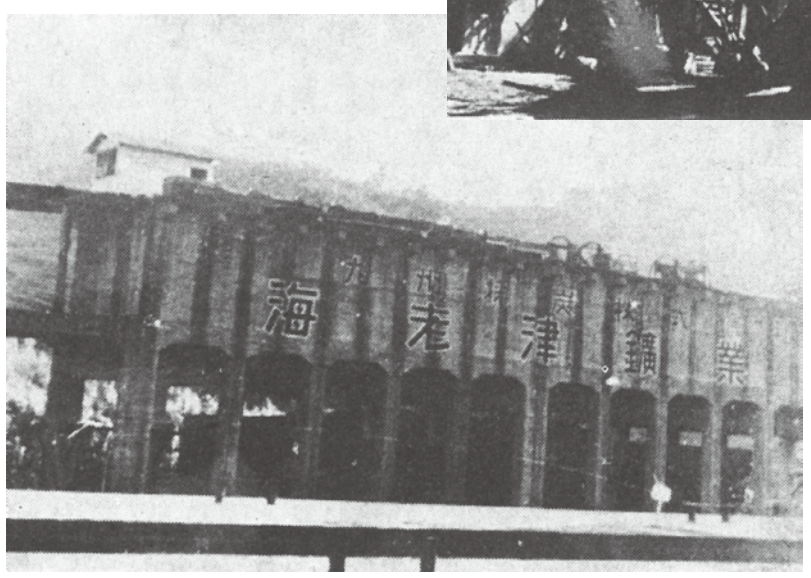
炭鉱労働の職種と実態

宇野文晶

炭鉱の労働は、坑内夫と坑外夫の二つがある。坑内夫には、直接夫と呼ばれる坑内労働者と間接夫と呼ばれる関連作業者がいる。坑外夫は、間接夫だけである。また、直接夫は、採炭・掘進・仕繰りの三者であり、坑内労働の主役である。間接夫は、労働能率に大きく関係している。このことから、炭鉱労働は、採炭作業に従事する直接夫と、それを関連作業で助ける間接夫の分業体制で成立している。採炭技術が導入され近代化がはかられている中、岡垣の炭鉱の実態は炭鉱作業において近代化が遅れ、不均衡で不利な条件を抱えていたといえる。そのため、岡垣の炭鉱の主流は、手掘り作業であったと考えられる。また、労働時間は一日を三交替（ひとかた）で働く三交替制が主流である。しかし、海老津炭鉱の場合は、一方採炭一方準備の方式をとっており、一番方で採炭、二番方で現場の整備を行うという方式であった。一日八時間労働ではあるが、地下深くでの作業であるため、労働条件は厳しく、困難であったに違いない。



海老津炭鉱選鉱場



海老津駅にあった石炭積み込み場

海老津炭鉱と高陽炭鉱

日南純希

海老津炭鉱

海老津炭鉱株式会社は、昭和九年に金丸勘吉を社長とする金丸鉱業株式会社に経営を移した。昭和十二年末に金丸勘吉が亡くなったことで、海老津鉱業㈱に変わる。この年、海老津炭鉱は国の重要炭鉱の指定を受けた。この後も経営権の変更が続いた。海老津炭鉱は、岡垣の炭鉱の中でも最も安定した稼行を続けた存在といえるが大正末期の炭鉱不況に伴う出炭制限で経営的稼行区域の採掘終了を理由に、昭和四年八月に同鉱二坑を廃坑にする措置がとられる。さらに昭和七年には打ち続く不況には勝てず、この年の六月の従業員四百人中百人を整理し、昭和十年十二月には第七坑を採掘終了で廃坑とするなど、経営上の曲折を経てきた。最盛期の昭和三年は従業員数千三百二十八人で十四万一七〇〇トンの出炭量をみている。なお昭和十八年当時の出炭能率は月平均一人当たり五・一トンという数字が出ている。石炭合理化事業団との売買契約時点での出炭年産実績は、五万三三七六トンとなっている。

高陽炭鉱

大正九年以来操業中止が続いたが、昭和十三年福岡鉱業株式会社が買い取り操業が再開された。昭和十九年に海老津炭鉱とともに、九州採炭株式会社の所属鉱になるに及んで、岡垣では最大の主要鉱山となった。高陽炭鉱は海老津駅から北の至近の距離にあって交通の便もよく、その社宅街は今の高陽区を中心に東松原区と西山田区にあった。坑口は高陽地区に、一坑と二坑があり、三坑が西山田地区にあった。高陽炭鉱のシンボルであったボタ山は、住持、高陽の丘陵の上に屹立してみんなに親しまれていた。昭和三十年ころには、老朽化した坑内機械整備や積込み機などを切り変えるなど、大きな経営努力が払われた。しかしその後の採炭条件の悪化や、「石炭鉱業合理化臨時措置法」の施行に伴う集中的な閉山傾向に抗しきれず、ついに炭鉱の灯が消えるときが来た。昭和三十二年八月二十九日、九州採炭㈱と石炭鉱業合理化事業団との間に高陽炭鉱の売買契約がなされ、ここに閉山が確定した。

特集 岡垣の

炭鉱の労働組合

平良優樹

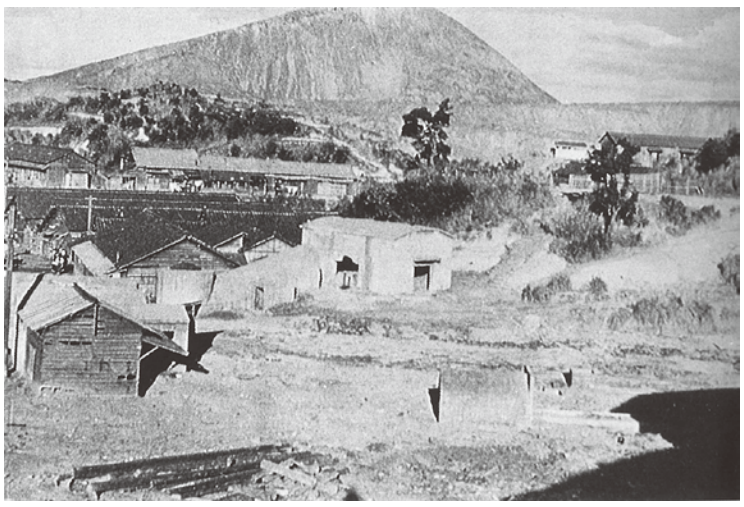
炭鉱労働者によって組織された労働組合、略称、炭労。第二次世界大戦後、相次ぎ発足した全日本炭鉱労働組合（全炭）、日本炭鉱労働組合総連合会（炭連）、日本鉱山労働組合（日鉱）の三連合体が結集し、一九四七年炭鉱労働組合全国協議会が結成された。しかし同年、炭連と日鉱が脱退し、中立組合とともに日本炭鉱労働組合同盟（炭労）を結成。一九四八年、日本炭鉱労働組合連合会と改称、のちに日鉱系が脱退し、一九五〇年日本炭鉱労働組合と改称して単一組合となった。日本電気産業労働組合（電産）とともに賃上げ長期ストライキ（一九五二）を行なったのをはじめ、一一三日に及ぶ三井鉱山企業整備反対闘争（一九五三）、三池闘争（一九六〇）など日本労働組合総評議会（総評）のもとで強力な闘争を展開した。その後、エネルギー転換で炭鉱の閉山が相次ぎ、最盛期二十九万人に及んだ組合員数は、一九九〇年代前半には二千人あまりとなった。日本労働組合総連合会（連合）に加盟したが、二〇〇四年十一月一九日に解散。その背景に一九八一年の北炭夕張新炭鉱ガス突出事故（死者九十三人）、一九八四年の三井三池炭鉱有明抗坑内火災（死者八十三人）、一九八五年の三菱南大夕張炭鉱ガス爆発事故（死者六十二人）といった事故が続き、日本での石炭事業はもはや成り立たないという認識が広く定着したからであった。

高陽炭鉱坑木置場と鉱員住宅

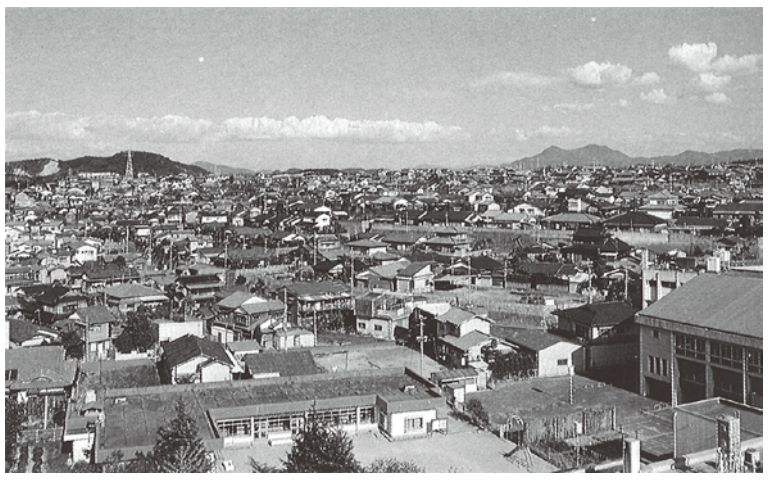
炭鉱と鉱業被害

梅崎龍之介

炭鉱は人々を支える大切なものであると同時に生活を脅かすものでもありました。炭鉱で起こる鉱業被害、いわゆる鉱害と言われるものです。鉱害の形態は様々で、地下水の大量排水に伴う地下水の涸渇、地表の池塘・河川の漏水をはじめ、家・田畑の陥没などに見られる直接的な被害があります。さらに坑内排水は、硫化鉄などを多量に含む場合があるので、この鉱毒水の流出は周辺の田畑に有害な影響をもたらしていました。また出炭された石炭は、郊外の選炭場で水洗による選炭を行うため、大量の微粉を含む泥水を排出し、これが河川に流れこむと河床が浅くなり水害の原因となっていました。岡垣の炭鉱は主要な採掘鉱区が古第三紀層を形成する東部丘陵地帯に集中していることから、鉱害もあまり平野部にまで及んでいないのが特色です。炭鉱による鉱害は生活に大きな影響を及ぼすため炭鉱の周りに住んでいる住民は鉱害を防ぐための補償を炭鉱を運営する側に要求していました。たしかに鉱害による被害は生活に影響を及ぼすものだからどうにかしてほしいという気持ちだったでしょう。しかし、炭鉱がなければ生活ができないということを住民は一番に考えていたのではと感じました。こういうときこそお互いが協力をして助け合っていくことが必要であったのではないかと私は思いました。



昭和33年閉山ごろの高陽炭鉱跡



新しい住宅地になった高陽炭鉱跡

炭鉱の閉山と産炭地問題

樽茶ちなみ

昭和三十年八月に施行された「石炭鉱業合理化臨時措置法」は、石炭産業斜陽化に伴う体質改善対策でスクラップ・アンド・ビルド政策と称された。これは非能率炭鉱をつぶし、高能率炭鉱を建て直すということである。これによる炭鉱合理化のテンポは予想以上に早く、そればかりか大手のビルド鉱までがスクラップ化にいたるなど、全国的な炭鉱閉山へのなだれ現象が起きた。福岡県では、昭和三十二年度末の炭鉱数二四六鉱が、六年後には八六鉱と約三分の一に激減している。岡垣の代表的炭鉱であった海老津炭鉱と高陽炭鉱は、昭和三十一年から三十二年にそれぞれ閉山となったが、これが当時の岡垣村に与えた影響は小さくなかった。鉱山地を抱える筑豊地区の各自治体は、すべて程度の差はあれ深刻な事態に陥った。炭鉱労働者の失業と困窮は、その家族、ことに子供たちも含めて生活不安を拡大していく。炭鉱閉山後、居残った人々が住んでいた炭住も、昭和三十八年八月に事業団から払い下げの決定がなされ、不安定だった生活基盤を自立させる助けとなった。今日では往年の炭鉱を偲ぶ遺物はほとんど痕跡をとどめていない。戸切百合野の海老津炭鉱跡及び高陽炭鉱本坑があった高見地区に、旧炭住の面影がわずかに残っているだけである。

コラム　夏目漱石の『坑夫』について

小丸超

夏目漱石と聞けばすぐさま『坊っちゃん』や『こころ』といった小説が思い浮かぶことだろう。しかし、あまり知られていないが、彼は創作活動の初期、一九〇八年に『坑夫』という風変わりな小説を書いているのである。

『坑夫』は一見凡庸な小説のように見える。自殺願望を持つ都会の青年が、生物学的な死と社会的な転落を求めて「坑夫」になろうとするのだが、病気にかかっていることが判明して都会に帰ることになる、という何とも呑気なインテリの物語なのである。

主人公は「死」を求めるが「生」への執着によって「この世」に縛られている。漱石はこの点を執拗に描き、インテリの弱さを暴露する。しかしそれだけではない。その一方で、漱石は「坑夫」をインテリの対極の存在として、すなわち「生」を求めるが「死」という避けがたい事実によって「あの世」に縛られている、そういう存在として描くのである。

『坑夫』は決して暗い小説ではない。むしろ漱石の筆致を思えば、ユーモラスな小説である、とさえ言えよう。しかし、暗い穴の中で響き渡る「カーンカーン」という音がユーモラスな雰囲気に楔を入れてくる。この乾いた音を聞くとき、読者は鉱山に漂う「死」の気分に誘われ、どこか哀しい気持ちになってしまうのである。

未来をつかむ
チカラを、
共に。
あなたと共に学び、
共に考える４年間が、
ここにはあります。
学校法人 福原学園
九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY
経 済 学 部
スポーツ学部
大学院 スポーツ学研究科
〒807-8585
福岡県北九州市八幡西区自由ケ丘1ー8
TEL.093-693-3305　FAX.093-693-3204

素敵な休日をエスコート
レンタサイクル＆バーベキュー
岡垣町観光ステーション
北斗七星
(一社)岡垣町観光協会
TEL 093-281-5050 FAX 093-281-5055
福岡県遠賀郡岡垣町大字原 670-34

（岡垣町役場 提供）

岡垣の炭鉱小史

その一　海老津炭鉱鉱主　吉田磯吉

吉田磯吉の銅像
（北九州市若松区高塔山公園）

はじめに

明治時代以降、日本の近代化の源動力となったのが石炭産業である。取り分け福岡県は筑豊地域を中心として多数の炭鉱（やま）が開山し、石炭産業は隆盛を極めた。そして麻生太吉・伊藤伝右衛門・貝島太助・松本健次郎・堀三太郎・佐藤慶太郎・蔵内次郎作・吉田磯吉といった複数の炭鉱王を誕生させた。彼らは皆、巨万の富を築き、それぞれの地元の政財界を牛耳り、さらには中央の政財界にも多大の影響力を持った。そういった人物の中で、岡垣町の海老津炭鉱の経営者（鉱主）に名を連ねた吉田磯吉のことを記してみたい。岡垣町の炭鉱の中で隆盛を誇り、高品質の石炭を産出することから、国の重要炭鉱に指定された海老津炭鉱の経営者の横顔にスポットを当ててみたい。

海老津炭鉱とは

岡垣町には、かつていくつかの炭鉱があった。古いものでは戸切地域の石炭採掘場がある。江戸時代末期（幕末）から明治時代初頭に採掘が行われていた記録がある。やがて大正時代ともなると、海老津炭鉱・柳谷炭鉱・白谷炭鉱・高陽炭鉱・徳満炭鉱が相次いで開鉱された。ただし大正七年（一九一八）頃から満州炭や中国炭が大量に輸入されてくると、岡垣の炭鉱にも不況の嵐が吹き、大正九年（一九二〇）には高陽炭鉱が操業休止、他の炭鉱も鉱主が度々変わり、岡垣の炭鉱は全般的に不安定であった。しかしそんな中、比較的頑張りを見せていたのが海老津炭鉱であろう。この炭鉱を本格的会社組織へ切り替えたのは吉田磯吉である。磯吉は、大正三年（一九一四）にこの炭鉱を株式会社として再整備し、資本金百万円、従業員数一二六一名を以て臨んだ。磯吉がこの炭鉱を手に入れたのは、海老津駅を利用しての石炭の積み込み、輸送が容易であったということであろう。磯吉の地元は若松市（現・若松区）である。若松といえば、当時は石炭の町として知られ、石炭の集積、積出は日本一であった。集積は若松駅、積出は若松港となっていた。海老津で産出された石炭は、列車で海老津駅から折尾駅へ、そして若松駅で集積、その後若松港から船で積出された。この一連のルートに磯吉の商魂が引き寄せられたと思う。磯吉が社長だった大正八年（一九一九）にはこの炭鉱の良質石炭が評価され、海老津炭鉱は、国指定の重要炭鉱となった。

吉田磯吉とは

磯吉は、幕末の慶応三年（一八六七）に筑前芦屋、現在の福岡県遠賀郡芦屋町で生まれた。磯吉の父・吉田徳平は、元々は伊予松山藩の武士だったが、脱藩して諸国を流浪し、最後に芦屋に定住、そして磯吉が生まれた。だが磯吉の幼少時に父徳平が死去、磯吉は少年の身で、魚介や野菜の行商をして生計を立てた。やがて磯吉は青年へと成長し、時代も明治時代となった。この頃、芦屋近くを流れる遠賀川に石炭を運ぶ船（川艜）が往来していた。磯吉は、この船の船頭となり、持ち前の腕力と胆力により、たちまち船頭仲間の内で頭角をあらわした。こうして船頭仲間で注目を集めた磯吉は、いつしか荒くれ者たちを束ね、遊侠の世界で親分となっていた。遊侠の世界に身を置いた磯吉は、姉が嫁いでいた若松へ移住、若松の地で小さいながらも一家を構えた。こうした折、明治三十三年（一九〇〇）、若松に居た、ならず者たち七十人に磯吉と子分十人で決闘を挑み、ならず者たち全員を若松から追い散らした。この一件により、磯吉は若松の顔役、有力者になった。

人侠政治家・磯吉とは

若松の有力者となった磯吉は、前記のように炭鉱経営にも乗り出した。そして炭鉱経営を始めた翌年、大正四年（一九一五）には民政党から衆議院議員に立候補、初当選する。以来、昭和七年（一九三二）まで議員として活躍した。特に争い事の仲裁に勝れ、調停名人、人侠政治家と呼ばれた。以下、磯吉絡みの事件のいくつかを記してみたい。まず全国的に知られた事件としては、明治四三年（一九一〇）に起きた「放駒事件」である。これは大阪相撲協会の力士が東京相撲協会に移籍したことから起こった協会同士の対立だが、これを円満に解決した。次に大正十年（一九二一）には政友会（政党）による日本郵船（海運会社）乗っ取り事件が起きるが、この乗っ取りを阻止した。その他地元の争議、騒動でも活躍、その存在感を見せつけた。たとえば明治三十四年（一九〇一）に八幡製鉄所が操業を開始すると、全国から大小様々な会社や商店が八幡の地に進出して来た。すると人の出入りが激しくなり、一獲千金狙いの無頼漢が多数流入し、地元の治安が乱れた。この時、地元の治安維持に動いたのが磯吉である。

また戸畑の牧山浄水場決壊による補償問題、さらには八幡製鉄所の用地造成に伴う埋め立て問題（漁業被害の補償）、こうした地元地域と地元企業のトラブルにも積極的に介入して問題を解決して行った。

小説「花と龍」・磯吉親分とは

若松出身の芥川賞作家・火野葦平（玉井勝則）の代表的小説に「花と龍」がある。葦平の父・玉井金五郎をモデルに記されている。葦平の父は、沖仲仕（陸仲仕）という石炭の積み降しを行う労働者の元締であった。若松を中心に繰り広げられる石炭産業の利権争いや騒動をリアルに描き、そこに男女の愛憎劇等を盛り込んだ作品である。かつては映画やＴＶドラマでも映像化された。この作品の中に登場してくる「磯吉親分」は、吉田磯吉がモデルになっている。この小説の存在、映画やＴＶドラマの効果で、磯吉のことは、より一層有名になったといえる。

磯吉の評価とは

磯吉、昭和十一年（一九三六）一月十七日若松の自邸で没した。享年七十歳。葬儀は、同じ月の二十六日、若松の浜町小学校で営まれた。この葬儀の折りの会葬者（参列者）は二万人にのぼり、米・一二〇〇俵、清酒・二〇〇樽、花輪・一〇〇〇がお供えとして献じられた。ちなみに国鉄（現ＪＲ）の筑豊線では会葬者のための臨時列車を増発している。そして昭和三十五年（一九六〇）には若松の高塔山の山頂に磯吉の銅像が建立された。なお、この銅像の制作者は佐藤忠良であるが、第一回高村光太郎賞を受賞している。磯吉は地元に根ざした政治家、地方の発展に貢献した人物として評価されている。まさに明治・大正・昭和の三時代を駆け抜けた一代の風雲児といえるであろう。

おわりに

来年五月を以て平成の世（平成時代）も終わろうとしている。流石に歳月は人の心を風化させる。磯吉のこともどうやら地元の人々から忘れられつつある。たとえば、磯吉の邸宅は無くなり、その跡地にサンリブ（スーパー）が建設されていた。そしてサンリブは撤退し、店舗の跡は駐車場となった。サンリブ現存時より、邸宅跡を示す標柱が建てられていたが、その標柱も今では郵便ポストの陰に隠れ、分かりづらくなっている。一方、高塔山にある銅像の方も見学者はほとんどないというのが現状であろう。著者は、本年五月に久しぶりに銅像を見に行った。予想通り、人影はなく、銅像周辺には雑草が繁っていた。ということで、これは著者からの一つの提案だが、岡垣町でも炭鉱（やま）の顕彰、見直しをされてみてはどうだろうか。今日の岡垣の発展に一役買った炭鉱、過去のものと忘れ去るのではなく、その痕跡があるのなら保存活用してみては。たとえば、地元の施設を利用して炭鉱の写真展等を開催し、町民の方々に炭鉱の存在を知らしめる。そうすることで、岡垣にも日本の近代化の一翼を担う歴史があったことが知られる。合わせて炭鉱と係わった吉田磯吉という人物にも再び光が当てられるのではないだろうか。炭鉱関係の遺跡が近代化遺産として見直されている今こそ、是非岡垣の炭鉱の歴史をふり返って欲しいと思う。

吉田磯吉の邸宅跡
（北九州市若松区浜町）

参考文献
岡垣町史　岡垣町
北九州市史跡ガイドブック　北九州市教育委員会
北九州の史跡探訪　北九州史跡同好会
火野葦平文学散歩案内　火野葦平資料の会
日本炭鉱都市　柳基憲「ライフ」

その二　海老津炭鉱鉱主　堀三太郎

はじめに

岡垣町の主要炭鉱の一つ海老津炭鉱は、複数の鉱主が遂次存在して来たが、そんな鉱主の中に堀鉱業株式会社というのがある。この会社を興したのは直方出身の炭鉱王の一人、堀三太郎、その人である。では海老津炭鉱に深く関係した人物の一人である堀三太郎とは如何なる人物であろうか。三太郎の横顔を追いつつ、海老津も絡んで発信された炭鉱経済が筑豊地区等の福岡県北部一帯にどう広がりを見せたか、多角的に記してみたい。

堀三太郎とは

三太郎は、慶応二年（一八六六）に筑前直方（現・福岡県直方市）の醤油屋・瓜生家に生まれたが、堀家の養子となり堀姓を名のる。青春期の三太郎は、筑豊地区の中小規模の炭鉱に醤油を卸すという商売をしていた。直方から醤油樽を川船に乗せて遠賀川をさかのぼり、勝野・小竹・鯰田等へ運搬するというものであった。そうこうする内、やがて商才を見込まれて炭鉱経営者の依頼によって炭鉱経営を手伝うことになる。

炭鉱王・三太郎とは

まず手始めに明治二十二年（一八八九）に御徳炭鉱を経営し、続いて権現堂炭鉱、本洞炭鉱というように経営の手を広げて行った。さらに大正元年（一九一二）には海軍から炭鉱の払い下げを受けて、軍艦用の石炭まで採掘するようになる。こうして事業を拡大した三太郎は、堀鉱業株式会社を設立した。そしてこの㈱堀鉱業が岡垣の海老津炭鉱にも進出、大正の二～三年には鉱王に名を連ねている。その後も三太郎の㈱堀鉱業は、田川等の各地域の炭鉱を傘下に治め、巨大化して行った。やがて麻生太吉・貝島太助・伊藤伝右衛門・安川敬一郎と並び称され、ついには筑豊の五大炭鉱王に数えられる。そして大正四年（一九一五）には中央政界に進出、衆議院議員に立候補して当選した。しかし政治に意欲がなく一期のみで辞職した。また大正九年（一九二〇）には筑豊石炭鉱業組合からも離脱している。

晩年の三太郎とは

炭鉱王にも数えられ、政界への出場を経験した三太郎は、地元での活躍の場を広げ、筑豊貯蓄銀行の頭取、直方商工会の会長を務めたりして、九州経済界の重鎮としての職責を果たしている。そして老齢の身となった三太郎は、自身の事業を整理し、宗像郡福間町（現・福岡県福津市）の広大な別邸で悠々自適の余生を過し、昭和三十三年（一九五八）に九十二歳の生涯を静かに閉じたのである。

堀家・本邸とは

海老津炭鉱の鉱主を一時期務めた三太郎の屋敷は、直方市の一画に築邸された。築邸されている場所は、江戸時代初期に直方藩・黒田家の応接所が在ったとされる場所で、その場所に明治三十一年（一八九八）に本邸として建築された。昭和十六年（一九四一）に三太郎より直方市へ寄贈された。寄贈されてからは堀クラブ、あるいは直方市会館と呼ばれ、昭和二十七年（一九五二）から昭和五四年（一九七九）の間は、直方市中央公民館として利用された。この折、結婚式場としても親しまれ、三千組以上の直方市民が挙式を行った。だが老朽化により使用停止となる。その後平成九年（一九九七）から同十年（一九九八）にかけて復元工事が成された。結果、直方歳時館として再オープンし、現在は市民の生涯学習施設として活用されている。

堀 三太郎　邸（本邸）
（福岡県直方市）

堀 三太郎　邸（別邸）
（福岡県福津市）

堀家・別邸とは

旧福間町（現・福津市）の花見海岸沿い、国道に面した一画に広大な敷地面積を誇る「福間病院」があるが、この病院こそが、かつての堀三太郎の別邸である。今でも広大な敷地面積であるが、往時はもっと広かったというから、三太郎の財力の大きさは底知れないものだったことが分かる。この広大な別邸は、三太郎の没後に三太郎の知り合いだった人物が邸宅地の大部分を買い取り、医療施設とし、病院や看護学校を建設した。現在でも病院の正門は別邸の門が使われ、敷地内には別邸の建物の一部や庭園も残されている。ちなみに、この別邸の門というのは、あたかも大名屋敷を思わせるような規模の門である。

おわりに

短い間とはいえ、海老津炭鉱に係わった人物として堀三太郎がいる。この三太郎の残した炭鉱遺産が直方の本邸であり、福間（福津）の別邸である。この遺産には近代日本の炭鉱パワー、岡垣の炭鉱パワーの一端が含まれている。ありし日の岡垣の炭鉱をしのぶ意味からも岡垣町民の方々には是非とも、この本邸や別邸を御覧いただきたいと思う。炭鉱の鉱主の邸宅としては、福岡県内では飯塚市の伊藤邸、築上町の蔵内邸が観光スポットとして広く知られているが、この堀家の本邸と別邸にも目を向けていただきたいものである。なお直方の本邸は、無料で誰でも建物の内外を見学できるが、別邸の方は病院となっていることから入口の正門のみが自由見学の対象である。

参考文献
福岡県の近代遺産　弦書房
旧堀三太郎邸・調査報告書　直方市教育委員会
ふるさと直方人物誌　直方商工会議所

（三浦明彦）

フィールドワーク感想

フィールドワークでは、資料に書いていないことを現地の人に聞くことができ、また実際に現地を感じながら学ぶことができたため、とても深い学びになった。炭鉱があった当時の写真と現在の写真を見比べることによって、変わっていない部分や変わった部分を見つけながら歩くことができ、当時をイメージしやすかった。歩きながら感じたことは、当時の家の形や道など変わっていない部分が多いということだ。坂が多く景色がいいのも、当時から変わっていないのだろう。炭鉱労働で疲れた人たちは、この景色をみて癒されていたはずだ。

宇野　文晶

岡垣の炭鉱について実際に現地の方からお話を聞き、炭鉱があった場所などを見ることで炭鉱について色々なことを学ぶことができました。私の地元は炭鉱で有名なところであるので地元の炭鉱についてもいつか詳しく調べてみたいと思いました。現地の方々が昔を懐かしみながら炭鉱について語ってくださったので、よりいっそう歴史を感じることができました。私も将来歴史について語るような活動をやってみたいなと思いました。

梅崎　龍之介

岡垣でのフィールドワークを通して、言葉としてしか知らなかった「炭鉱」というものを身近に感じることができた。特に、当時の生活していた風景がそのまま見ることができ素晴らしい経験となった。五軒長屋という言葉自体も初めて聞くもので、それを目の当たりにすると当時の大変な暮らしぶりをよく知ることができた。壁というには薄すぎる一枚の板で隔てられた家族の居住スペースは今の私たちの生活している空間とは比べ物にならないくらい狭く、すべてが筒抜けになるのではないかと思うほどのものだった。そのような空間だったからこそ、そこで生活をする人々の関係が親類よりも深いものになったのだと思うと少し羨ましいと感じた。

工藤　匡貴

今回、岡垣町の歴史について学ぶ機会を得て、炭鉱の歴史について学ぶことができた。話を聞いたりインターネットなどで調べるより、やはり現地に足を運び、その場で現地の人の話しを聞くことにより興味もわいてきた。歴史のある建物をまじかで見て、石炭を実際に焼いて見せてもらうような体験をさせてもらい、とても有意義なフィールドワークになった。私たち町外の人間が、町の歴史を調べ再発見したり学んだことを多くの人に伝えることで、岡垣の素晴らしい歴史をもっと、町内外の人に知ってもらえればいいと思った。

平良　優樹

私は、この岡垣歴史新聞プロジェクトで岡垣という町を調べていく中で、同町が非常に歴史の深い町であることを学んだ。また、実際に行ったフィールドワークでは、もちろん炭鉱そのものや、それに併設していたような施設は残ってはいなかったが、炭鉱の労働者が住んでいた家や豆炭などはきれいに残っており非常に驚かされた。フィールドワークに同行してくださった方々から聞いた話で、炭鉱の中は非常に暑いもので、みんな服を脱いで作業していたという話を聞いた際、家族で掘削するということにもうなずけた。今回のフィールドワークは、自分にとって大変貴重な体験になったと感じている。また機会があれば町の違った歴史の学びを深めたい。

長瀬　智彦

「石炭とは何か?」。その質問をされると今までは答えられませんでした。今回のフィールドワークではその石炭のことを中心に学びました。石炭とは、樹木が化石化したもので火力発電や製鉄の燃料として利用されていました。実際に石炭を燃やしているところを地元の人に見せてもらいました。紙や木が燃えているのとは大きく異なっていて白い煙が出てきました。石炭は紙や木と違い長く燃え続けるそうです。海老津駅から資料と照らし合わせながら現在の町を巡りました。当時とは大きく変わっているところもありながら石垣やその周りの様子から時代の流れとともに現在の様子になったことを窺うことができました。思い返してみるとタモリさんが司会の歩きながら知られざる町の歴史や人々の暮らしに迫る「ブラタモリ」に出演しているかのようでした。いまだに豆炭などが石垣の周りに散らばっており実際に触れることができました。また長屋という炭鉱で働いていた人たちの住まいも見ることができました。文字通り家を五〜七つくらいの部屋に区切り生活していたそうです。部屋を隔てる壁はとても薄く現在のようなプライベートな空間はありませんでした。お手洗いも共同で洗浄も手動でした。長屋の生活様式に肌で触れることで、当時の生活を想像し感じることができたと同時に、現在の生活の質の高さを感じることができました。また周辺には、ボタ山という石炭や亜炭の採掘に伴い発生する捨石の集積跡がありました。九州共立大学の敷地にも闘魂山というボタ山があります。後に闘魂山周辺を歩いているときに炭鉱で亡くなられた方々の慰霊碑がありました。案内された方も言っておられましたが多くの危険が伴うため、労働中の事故によって亡くなられた方も多くいたようでした。そのため作業員の方々も命がけで働いていたのだと思います。今回のフィールドワークによりものの見方が変わりました。日々なんとなく暮らしている町やその周辺には多くの人々が生きた証があり、長い歴史があることを知りました。この経験により現在では当たり前なことで些細なことでも感謝の気持ちを持って生活できるようになると思います。これから生きていく上で大切なことを学びました。

日南　純希

石炭と木炭の違いを知っていますか?

今回のフィールドワークを経験するまで、石炭と木炭が違うものということは知っていましたが、この二つの「炭」の区別はわかりませんでした。今回の特集テーマが石炭ということで、まず、インターネットで調べてみました。石炭は私の出身地で「煤炭」と呼ばれています。しかし、「煤炭」は生活にほぼ用いないので、普通は目にすることは少ないです。つまり、石炭は重要な資源として人間の生活に役にたちますが、中国の国民が知る機会はあまりありません。石炭の認知度が低いのです。石炭は植物から形成されます。古代の植物は地面の下で何千年もわたって、いろいろな物理的な変化と生物的な変化を通して可燃鉱物になります。石炭は発電、蒸気機関、セメント、玻璃作り工業に重要な役割を持っています。現在では、その役割の比率が石油に多く依存しており石油の資源が日増しに枯渇しています。石炭の備蓄が大きいので、それでも石炭は活用されています。木炭は木材を燃焼させて作られます。原料の木材の構造はそのまま保存されます。普通には、木炭は家庭用に使用されます。例えば、BBQや焼肉の燃料としてよく使われます。吸湿の特性があるので乾燥剤としてもよく使われます。木炭は製錬工業の燃料と化学工業の原材料として欠かせない重要な資源ともなっています。今回のフィールドワークで、説明をしていただいた岡垣町の住民の方から、石炭と木炭の燃焼実験を見せてもらいました。石炭が燃焼する時に黄色の煙がでました。石炭の特性の一つで硫黄を含んでいるからだそうです。木炭にも少し含みますが、含有量が低いので安全に家庭で使用することができます。石炭は工業資源として使われるので、日常生活ではあまり関係ないものとなっています。それに対して木炭は日常で使用されることが多いので、同じ「炭」でも身近に感じました。

佘　婷婷（留学生・中国）

［ フィールド・ワーク　2018.5 ］
岡垣町

編集後記

岡垣町に、かって炭鉱があったことを知る住民の方は少なくなってきたと思います。本紙の巻頭でも述べましたが、明治・大正・昭和という日本の大きな歴史の流れの中で、炭鉱が最も重要な産業の一つであった時代がありました。日本人の生活を支えていたのです。岡垣町の炭鉱もその一つでした。

先日の毎日新聞（二〇一八年十月十日地域版）に、福岡県田川市を中心とした筑豊炭田遺跡群が国の史跡に指定される方向で進んでいるという記事がありました。その中で、私の知人でもある田川市石炭・歴史博物館館長の森山沾一氏が次のように語っていました。「明治、大正、昭和と筑豊の炭鉱は日本の近代化に貢献し、日本の歴史で重要な役割を担ってきた。」、「炭鉱の歴史をマイナスとみる向きもあったが、国指定史跡となることは国がその意義を認めたわけで、市民もこの遺産に誇りをもってほしい」という内容でした。岡垣町の炭鉱から掘り出された石炭は、その質が大変良好で重宝されたということです。確かに、日本における炭鉱の歴史は明るく語られるものではありませんでした。しかし、歴史とは過去のすべてを受容し、そこから豊かな社会を築くことが望まれるのではないでしょうか。それが地域社会の再認識であり、地域活性化やまちづくりの原点でもあるだろうと思うのです。

（山田　明）

九州共立大学プロジェクト・メンバー（学生）

協力者（フィールドワーク）
中葉 允雄さん　岡田 達雄さん

2018年度　地域連携事業 【岡垣町／九州共立大学】『岡垣歴史新聞』プロジェクト・メンバー

指導教員	九州共立大学スポーツ学部	山田　明・小丸　超
活動した学生	九州共立大学スポーツ学部３年	宇野　文晶・梅崎龍之介・工藤　匡貴・平良　優樹 樽茶ちなみ・長瀬　智彦・日南　純希
	九州女子大学（留学生・中国）	佘　婷婷
協力者	歴史愛好家（遠賀郡在住）	三浦　明彦

出典
＊「岡垣歴史新聞第３号」の作成につきましては、以下の書籍等を引用・参考文献として使用させていただきました。
『岡垣町史』（岡垣町史編纂委員会）1988年、その他岡垣町役場提供の諸資料（写真データを含む）